

資料紹介 同志社大学歴史資料館所蔵の鉄柄斧

榎 和泉

1. はじめに

同志社大学歴史資料館（以下、歴史資料館）には、鉄柄斧¹⁾が1点所蔵されている。

鉄柄斧は、日本列島内で50点程度の出土が確認されているのみであり、希少な副葬品として認識されている。これまで、朝鮮半島系の遺物として紹介されることが多かったが、近年の研究において、型式学的検討が進展し、日本列島内で生産された可能性も指摘されている（河野2021）。また、本来有機物である柄を鉄で製作する鉄柄利器は、鉄柄斧に限らず、奈良県メスリ山古墳出土の鉄弓・鉄矢や兵庫県雲部車塚古墳出土の鉄鉾などの事例が存在し、鉄器生産体制や副葬鉄器の象徴性を考える上でも注目される（鈴木2005）。

本資料は、これまで正式に公表されてこなかった。こうした未報告資料の資料化は、考古学研究を進展させる上で必要不可欠な作業であると考え、この度報告に至った。

2. 鉄柄斧の特徴

事実報告 本資料は、刃縁²⁾が柄部と直交する横斧である（図1）。柄部下端が欠損しており、表面が剥離している部分もあるが、全体の形状や柄部の断面形などは判別できる。

刃部先端と柄部下端を水平に据え置いた場合に、残存長22.8cm、高さ12.7cmを測る。身部の正面形は、長形状であると推測される。刃部は、縦長で明瞭に張り出す肩を持つ。刃部残存長5.1cm、刃部残存幅4.7cm、刃部残存厚0.6cmを測る。

柄部との結節点付近である基部形状は、剥離のため不明瞭ではあるが、張り出しが確認でき、肩を持つと推測できる。基部残存長4.0cm、基部残存幅2.1cm、基部残存厚0.6cmを測る。

柄部の側面形は、柄部上部から下部にかけて直線状に伸びるが、柄部下端から4.0cm付近でわずかに湾曲する。基部付近および柄部中央付近の断面形は、一辺が1.1cmの隅丸方形である。柄部下端付近の断面形は不明であるが、柄部残存幅1.3cmを測る。柄部幅は、柄部下端に向かって緩やかに幅を増す特徴を持つ。柄部と握部の境界は、欠損のため不明である。

本資料の位置づけ 本資料は、身部正面形が長方形であること、柄部断面形が方形であることから、河野正訓氏の分類（河野2021）における3群に該当すると考えられる。3群の鉄柄斧の類例としては、京都府宇治二子山北墳・大阪府百舌鳥大塚山古墳・大阪府七観古墳・福岡県宮司井出ノ上古墳・佐賀県山王山古墳・岐阜県昼飯大塚古墳出土例が挙げられ、おおよそ中期初頭から中期中葉に位置づけられる。

3群の鉄斧柄の柄部側面形に着目すると、七観古墳出土例のように柄部上部から下部にかけて反りをもつもの（図2-1）も存在するが、その多くは下部に向かって直線状に伸びる特徴をもつ。また後

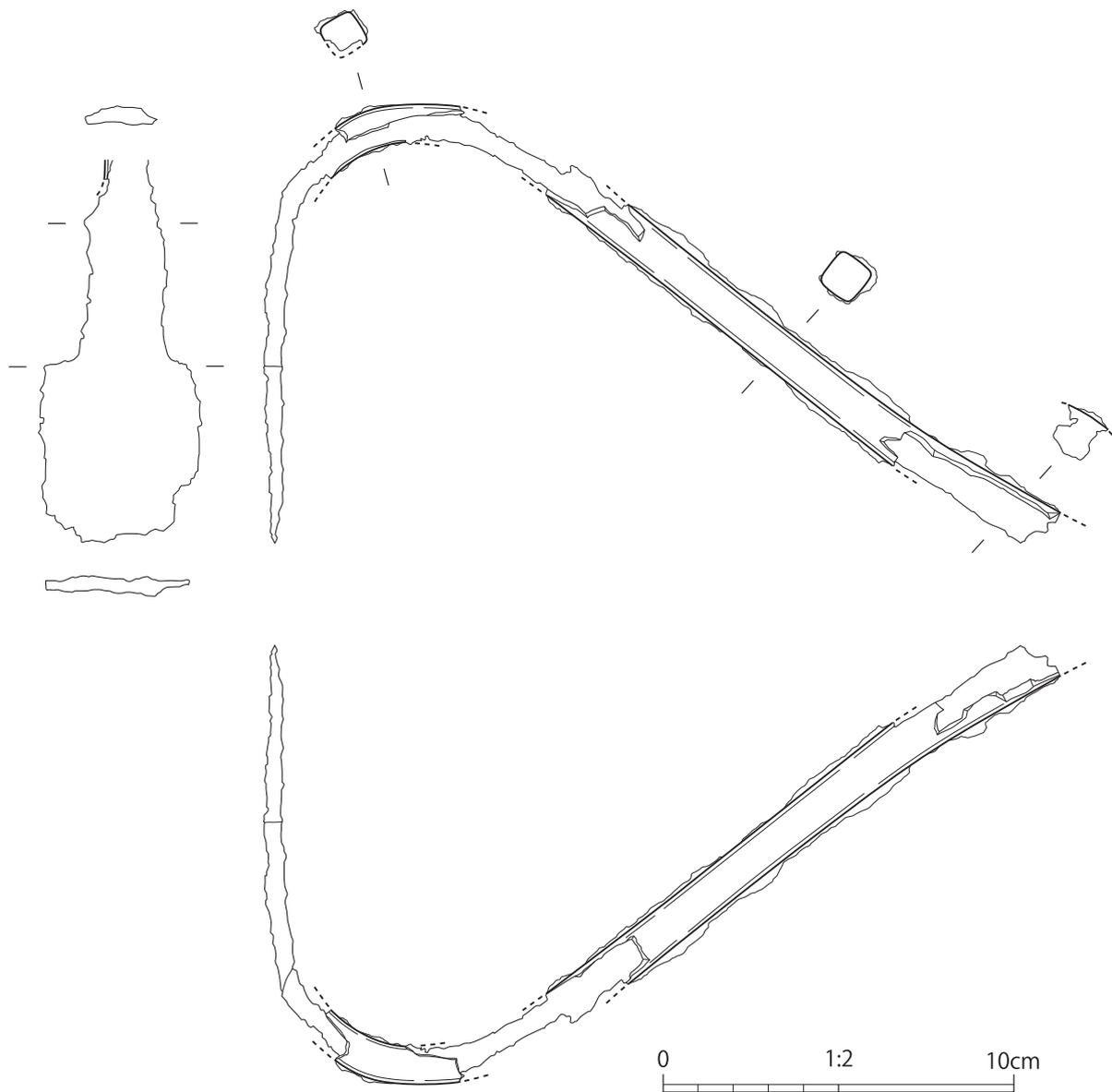


図1 歴史資料館所蔵の鉄柄斧 (S=1/2)

者の鉄柄斧においては、宮司井出ノ上古墳・山王山古墳出土例のように柄部断面形が円形のもの（図2-2）や、昼飯大塚古墳出土例のようにねじりを施すもの（図2-3）、宇治二子山北墳・茶すり山古墳・百舌鳥大塚山古墳出土例のように柄部断面形が方形のもの（図2-4）が認められる。本資料は、柄部の側面形が比較的直線状であり、柄部断面形が方形であることから、宇治二子山北墳・茶すり山古墳・百舌鳥大塚山古墳出土例と型式学的な関連性がうかがえる。

3. おわりに

本稿では、同志社大学歴史資料館に所蔵されている鉄柄斧の紹介と簡単な位置づけを行った。一方で、本資料の来歴について明らかにすることができなかった。今後も関連資料の検索を続け、出土古

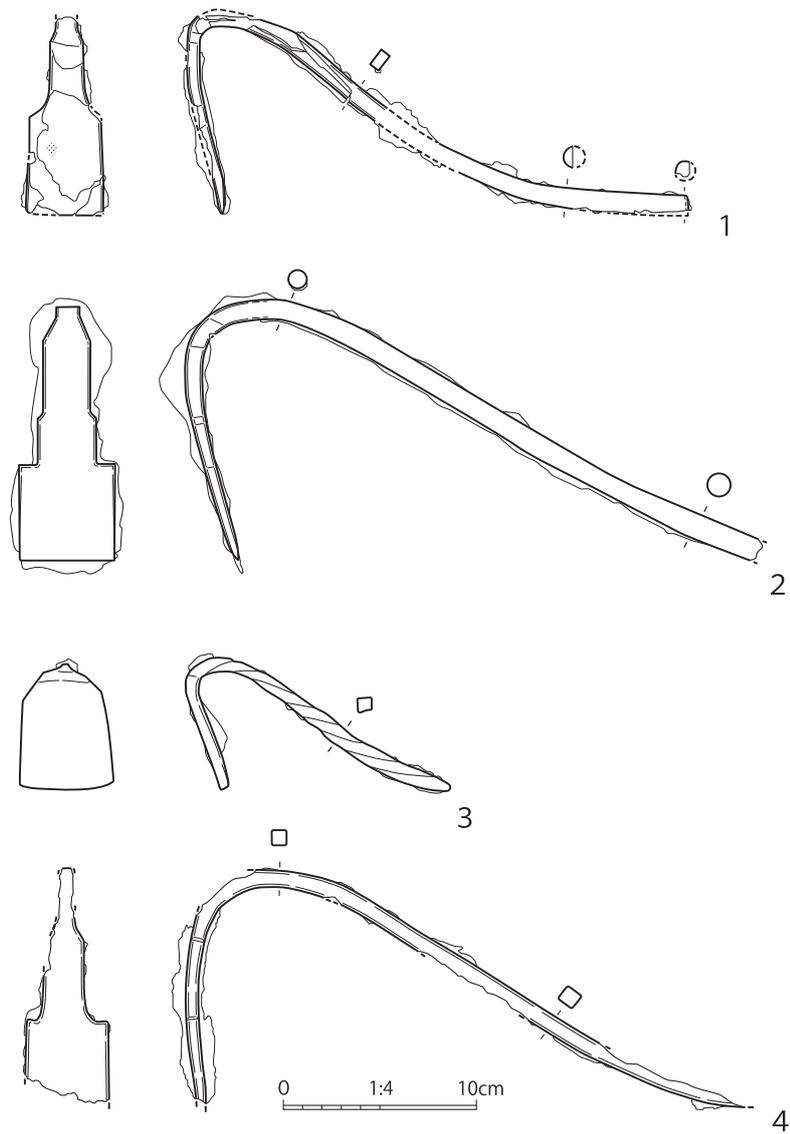


図2. 3群の鉄柄斧の諸例 (S=1/4)

1. 七観古墳 2. 山王山古墳 3. 昼飯大塚古墳 4. 百舌鳥大塚山古墳

墳の検討を行う必要がある。本資料が今後の研究の基礎資料として広く活用されることを期待したい。

本稿をなすにあたって、以下の個人および機関に多大なるご助力を賜った。記して感謝したい。

池田野々花、菊池 望、繰納民之、辻川智代、浜中邦弘、廣重知樹、同志社大学歴史資料館、吉田生物研究所

註

1) 本稿では、本来木製である柄部まで鉄で作られた手斧を、近年の研究で用いられている「鉄柄斧」と呼称する。

2) 各部名称は、河野2021に従った。

〔図出典〕

図1 筆者作成

図2 1: 河野2021第64・65図を再トレース、一部改変 2・3: 河野2021第6図を再トレース、一部改変
4: 河野2014第161図を再トレース、一部改変

〔参考文献〕

河野正訓 2014「柄付手斧の系統」『七観古墳の研究—1947・1952年出土遺物の再検討—』、京都大学大学院文学研究科、273-278頁

河野正訓 2021「日本列島における古墳時代の鉄柄斧」『考古学雑誌』第103巻第2号、日本考古学会、1-32頁

鈴木一有 2005「蕨手刀子の衰退」『待兼山考古学論集 都出比呂志先生退任記念』、大阪大学考古学研究室、519-538頁

樋口吉文 2008「古墳出土の鉄製柄付手斧をめぐって」『古代学研究』第180号、古代学研究会、181-192頁



写真1



写真2

